



ストライプ構造からの発展 : 脱規則性がもたらす絵画の可能性について

岸本, 吉弘

(Citation)

基礎造形 : 日本基礎造形学会論文集, 020:74-75

(Issue Date)

2012-03

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001712>



ストライプ構造からの発展－脱規則性がもたらす絵画の可能性について

Development from Stripe structure

－Painting Character Attributed to out of Regularity

岸本 吉弘／Yoshihiro Kishimoto

神戸大学大学院 人間発達環境学研究科／Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University



「レッド・バロン」

素材：キャンバスに油彩、蜜蝋

サイズ：h 291cm×w 197cm

制作年：2011年

1. はじめに

筆者は、筆致がもたらす物質感とその空間性を大画面絵画において追求してきた。それらは何かが突出し前面化する空間性ではなく、筆致や色彩、形態などの絵画的諸要素を、ある関係性（均質性）のもとに融合させるものであった。しかる意味においてはオールオーバーな空間性の獲得を目指してきたともいえる。そうした中で10年程前からストライプの構造を、絵画空間に汎用できないかと工夫を重ねている。当初は、その反復を繰り返す規則的な構造で全面を覆い、画面を統制できないかと模索を続けていたが、次第に画面の半分程度を分割し、色面空間とストライプ空間を対比融合させるタイプの作品を多く制作した（図1～3）。近作においてはその分割対比がむしろ弱くなり、色面空間とストライプ空間が干渉し合い一体的・一面的な融合を目指している（図4）。しかしながら、より複雑で多義的な絵画空間を希求する筆者にとって、平面性を強く肯定する規則的（機械的）な性質のストライプ構造は、既に過去の通過点となりつつある。



図1



図2



図3

2. 制作プロセス

従来からのストライプ構造を画面構成的な根底におきながらも、そこからの逸脱（発展）が本作「レッド・パロン」の課題である。画面には「描くストライプ」と「消すストライプ」を多重に混在させ、描く消す試みの繰り返により、最終的にその表情はストライプの規則性を僅かにアクセントとして残すに留まっている（画面左半面など）。また、ここ2、3年の近作においては図と地の2色（黄系統と青系統）を主として用い、その色彩対比により画面構造を描き上げてきたのに対し、本作ではこれまでに無い色彩の使用を試みた（タイトルにも由来する）。それは図（白）と地（青）だけの単一な様態を回避し、色彩的にもより豊かな空間性を獲得するためであった。そこでこれまで使用頻度の低かった赤系統の色彩を画面面積5分の2程度に、色面的に（場合によっては線的なアクセントとして）用いたのである。それは青系統の色彩との補色に近い対比を成すと

ともに、ストライプ（白色）の残跡とは色彩的にも近接させ調和する画面となった。



図4

3. 考察

ストライプ絵画やレリーフ・ペインティングなどで知られる美術家フランク・ステラ（1936～）は自身の初期のブラック・ペインティングとアメリカ抽象表現主義の画家ジャクソン・ポロック（1912～1956）の作品との関わりについて次のように述べている。「私は、もしそれがポロックのようなものであるとするならば、いわゆるネガティブなポロック主義的なものを手に入れようと思いました。…（中略）私は均質性、一種のオールオーバーネスを得ようと思いました。そこでは強度、彩度、濃度が画面全体にわたって一定を保ちます。」（註）

改めて近作を振り返ってみると、これまで筆者が積極的に研究材料としてきたオールオーバー絵画への近接性が想起される。これまでストライプ構造を軸とした図と地の2色対立（対比）により空間（奥行き）よりも平面性（浅い奥行き）を求め、見る者の視線が矩形画面よりも外に拡がりゆく様態を諒としてきた。それは上記のネガティブなポロック主義とも影響関係を結ぶ。

そこで本作に至っては第3の色（赤系統）を加えることにより、図と地のみ対立は回避され、構成的にも色彩的にもより複雑なものになった。また面的な色彩使用は他の諸要素との対比を生み、奥行きへの空間的なアプローチも可能となった。こうした3色以上の色彩対比をストライプ無き後の自作に反映させ、できれば「描く」ことそのものが純粹に前面化する「絵画のゼロ地点」のようなものを推敲し続けることが今後の課題でもある。

註

William S. Rubin, *Frank Stella* (New York: The Museum of Modern Art, 1970)

図版

図1) 諸葛亮 キャンバスに油彩、蜜蝋 h227×w364cm 2003年制作

図2) Zの旗 キャンバスに油彩、蜜蝋 h194×w130cm 2004年制作

図3) Zの旗II キャンバスに油彩、蜜蝋 h259×w194cm 2004年制作

図4) GATE キャンバスに油彩、蜜蝋 h333×w249cm 2009年制作